

「仕方がない」

ここまで来たら逃げ歩かないのです。銀銅のいう通り
(一時預けるだけ)と、自分に言い聞かせるようにして、
承知しました。

(これで舞臺はダメになった)

十枚の一万円札を数えながら、つと思ひ、すぐ、あわ
てて打ち消しました。

(そんなことはない。一ヶ月で返してくれるんだから、
あきらめることはない)

しかし、悪いことはよくあるものです。

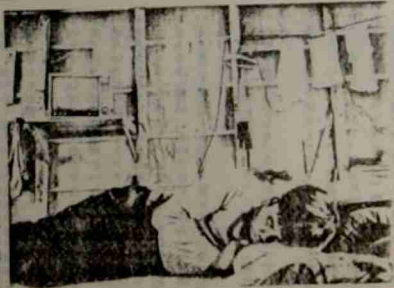
一ヶ月後――

「今月は出戻が出来へんねん。兄ちゃんとの都合が悪いよ
ってナ。来月はきつと返すから」

ということになり、その後も、二万か三万づつぐらい
返してくれたのですが、小さく返ってきた金は、そ
のたびに、なし崩しに消えてしまいました。

銀銅は最後の返済のとき、利息のつもりでしよう。メ
ロンとシャンをくれました。

が、あのとき立ち消えになつた舞臺の自費出版はその
れなりけりのまま、十数年たった今も塵の目を見ていま
せん。



神守て眠れば
秋景の夢

笠ヶ崎の冬の夜を彷彿して

作れる歌、併せて短歌二首

そぞろきの 笠のトヤ街、さ夜更け
て 流離の 貴種の子等は 筆枕
軒端 軒端に宿を借り 香つつ 懐れに
く旅衣 破れ 裂れど 引き被り 短
し 眠りをおさぶれど 雨は降り来る
くぐ水 降り来る 長き夜を 覆ても
居ら水す 起きても居られず つか
ぶき女して 身ぶるいどして 玉の
飾の 切れんとするを未だき休めて
身につれども 魂の 残ゆること
なき 冬の夜は仕く。

旅衣 歌 汚れ破れに吹く風の

寒き路上に 夢も凍れり

天津罪 因津罪かよ この罪は
神さぶる代の母の筆の子の

(1982.1.31)

笠ヶ崎の春に仕事にアアして

作れる歌、併せて短歌二首

四月は残酷な月だ
これは毎年のことだが
今年の特にひどい
いつ迄三月で公共事業が終わり
四月の中頃に仕事が減るのだ
だが 今年
四月に入ったとだんに
全然弱くなった

春休み研究発表 才又部

年表・資料篇



法人という幽霊が

なま身の人間を喰いつぶす

四月は残韻な月だ

岩^{いづ}漱^する重水^{ちゅうすい}の上に早^{はや}わらびは解^とれ
 造成^{せいせい}した宅地^{たくち}の周囲^{しゅうい}に
 タンポポオオみ水^{みづ}は咲^さき乱^{みだ}れても

春^{はる}のオオみは深^こく

先^まを見^みることは出^で来^きない

反歌

ひさかたの光^{ひかり}のどけき春^{はる}の日に

翻^{ひら}ころなく仕事^{しごと}を探^{たず}ね

わひぬれば身^みを浮草^{うきくさ}の根^ねを掘^ほえて

誇^ほり手配師^{ていし}が有^あれば行^いかんこそ思^{おも}う

馬之骨

山谷^{やまや}往^いけば 草^{くさ}舌^{した}才^{さい}屍^し 釜^{かま}往^いけば
 水^{みづ}づく屍^し 人^{ひと}天^{あま}出^いし飯^い場^ばのへに
 こと死^しなぬ 反^へり見^みはせず

(翻^{ひら}ばん男^{おとこ}・冬^{ふゆ}の歌)

知歌

翻^{ひら}だたがる 女^{おんな}ばかりの

世^よの中で

翻^{ひら}ばんしと言^いうて

土^{つち}揺^ゆる男^{おとこ}



翻ばん男